

3 平安時代と現代の記録「アチ」の推移

3.1 『延喜式』の「アチ」

『延喜式』は、平安時代中期に編纂された三代格式の一つである。905年（延喜5年）、醍醐天皇の命により藤原時平らが編纂を始め、時平の死後は藤原忠平が編纂に当たった。

『弘仁式』『貞観式』とその後の式を取捨編集し、延長5年（927年）に完成した。その後改訂を重ね、康保4年（967年）より施行された。

あちのえき 阿知駅 長野県阿智村
あちまのえき 阿味駅 福井県

3.2 『和名類聚抄』の「アチ」

『和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』は、平安時代中期に作られた辞書である。承平年間（931～938年）、勤子内親王の求めに応じ源順（みなもとのしたごう）が編纂した。

あちえのごう 謁叡郷 京都府加悦町
あちのごう 阿智郷 岡山県倉敷市 備中国浅口郡八郷の一つ。
あちのごう 阿智郷 岡山県倉敷市 備中国窪屋郡五郷の一つ。
あちまのごう 味真郷 福井県武生市

3.3 現代の「アチ」

あちかや 阿知ヶ谷 静岡県島田市向谷
あちがわ 阿知川 長野県阿智村時又
あちさわ 西風沢 秋田県雄和町悪戸野
あちじんじゃ 阿知神社 岡山県倉敷市
あちはら 阿知原 長野県下条村
あちもと 安知本町 三重県亀山市椋本
あちややま 阿茶山 岩手県江刺市人首
あちやる 阿沙流 北海道豊富町

4 倉敷市の阿智神社

阿智神社（倉敷市本町）は、『和名類聚抄』に、阿智郷 備中国浅口郡八郷の一つとして記録されている。阿知使主の一族が渡来し、この一族の一部が倉敷市周辺に定住した事が「阿知」の地名発祥、社号の由来と説明している。祭神は多紀理毘売命・多岐都比売命・市杵嶋比売命の宗像三神である。祭神からは宗像神社であり、阿智神社ではない。

4.1 岡山市東区上阿知の春日神社末社 阿知神社

春日神社（岡山市東区上阿知）は古来阿知村桜田に鎮座を現在地に奉遷した。祭神は天児屋根命である。末社阿知神社の祭神は不明である。末社の意味は、平安時代迄に関係者が全員移転し、阿知の地名のみが残されたものである。移転先は不明である。

『改訂 邑久郡史 下巻』の「安仁神社御伝記」に、「現在の村社春日神社は、往昔同村桜田と云ふ地に鎮座ありしを、後今の社地に遷せりといふ。阿知にあり、春日神社といふ

当社旧跡同所の内字ナ桜田といふ地にありて、古宮と云伝へたり。天兒屋根命は太古に朱桜を用ひ給ひし事、記紀に見えたれば、旧社地桜田は大に縁故ある所なりけり」とある。



阿知村桜田の古宮跡



春日神社末社 阿知神社

4.2 長野県の阿智神社（奥宮）



平安時代中期の『延喜式』に記録されている。阿智神社奥宮（長野県下伊那郡阿智村智里）の祭神は、阿智族の祖・天八意思兼命（あめのやごころおもいかねのみこと）とその御子、天表春命（あめのうわはるのみこと）とされ、全国の総本社とされている。

この二神は信濃国に天降って阿智の祝の祖となったことが『先代旧事本紀』に記録されている。

八意思兼命は、『古事記』では、高天原の最高司令神・高御産巢日神（たかみむすひのかみ）の子・思金神（おもいかねのかみ）とされている。

5 阿知使主と呉国の記録

三十二年、三十六年、萬機無事、唯敬穀御、

二十有七年二月戊午朔己巳、天皇詔、遣吾路使主及戶上使主於吳國、兮、求縫工女、吾路使主等渡於高麗國、欲達于吳國、更不知道路、乞知道路者於高麗王、高麗王長承副、吳發、吳貢二人之吳人、以為導者、由是得通吳也、吳王畏於皇命、勅令國中、撰吳漢工、即獻工女兄媛、弟媛、吳織、漢織四婦女焉、

『先代旧事本記大成経』卷二十三 天皇本紀上卷上

阿知使主と呉国との関係は、『日本書紀』卷十 応神天皇「三十七年の春二月（きさらぎ）の戊午（つちのえうま）の朔（ついたちのひ）に、阿知使主（あちのおみ）・都加使主（つかのおみ）を呉に遣（つかは）して、縫工女（きめめひめ）を求めしむ。ここに阿知使主等（ら）高麗国（こまのくに）に渡りて、呉に達（いた）らむと欲（おも）ふ。則ち高麗（こま）に至れども、更に道路を知らず。道を知る者を高麗に乞ふ。高麗の王（こきし）、乃ち久禮波（クレハ）・久禮志（クレシ）、二人を副へて、導者（しるべ）とす。是に由りて、呉に通ること得たり。呉の王、是に、工女兄媛（ヌヒメエヒメ）・弟媛（オトヒメ）・

吳織（クレハトリ）・穴織（アナハトリ）、四（よたり）の婦女（をみな）を興（あた）ふ。」

6 古代蒙古からの渡来人「アチ」

蒙古のいろいろな風俗が高麗で、主に王室や貴族・役人など上流階層を中心にして流行した。韓国語の中にチャンサチ（商売人）などのようなアチやチがつく言葉や、王のお膳を意味するスラ（水刺）という言葉なども蒙古語の影響を受けている。現在のモンゴル語では、アチは孫である。阿知使主の出身地は古代蒙古と推定される。

7 麻御山神社の記録

麻御山神社（オミヤマ・岡山市東区邑久郷）の神山を麻御山という。『岡山県神社誌』には、「神武天皇の御東征に御供をした者が、天皇が吉備の高島に御滞在のとき、詔によって齋服を調進するため、ここに麻を植え紡績なされたのがもととなって奉斎した神社である。」とある。史実は応神天皇が阿知使主・都加使主を呉へと派遣して縫工女を求めた。即位 37 年春 2 月 1 日。阿知使主・都加使主を呉へ派遣して縫工女（キヌヌイメ）を求めたのであり、神武天皇ではなくて、応神天皇の間違いである。別格の神社であり安仁神社の遙拝所には含まれない。

8 考察

『日本書紀』「応神天皇三十七年」の阿知使主と呉国との関係は、大伯（タイハク）の研究にとって重要である。周辺に呉国関連地名があるはずと考え調査したら、呉国訪問記録が確認された。応神天皇三十七年は 4 世紀の記録である。下記を確認した。

『日本書紀』と朝鮮半島最古の歴史書である 1145 年完成の『三国史記』「百濟本紀」とを比較する。応神天皇 3 年条に百濟の辰斯王が死去とあり、「百濟本紀」の辰斯王の死去は西暦 392 年である。応神天皇 8 年条に「百濟紀には、阿花王（あくえおう、あかおう）が王子直支を遣わした」とあり、「百濟本紀」の阿花王（阿莘王/阿芳王）が太子腆支（直支）を遣わした年（阿莘王 6 年）は西暦 397 年である。応神天皇 16 年条に百濟の阿花王が死去とあり、「百濟本紀」の阿花王（阿莘王/阿芳王）死去（阿莘王 14 年）は西暦 405 年である。

8.1 阿知村桜田の古宮跡と富幸神社

大伯國

富幸神社

檀原宮天皇時、銀御魂大神由分野時、鎮坐

『安仁神社御伝記』は、春日神社の古宮鎮座説であるが、推古 30 年（622）成立の『先代旧事本記大成経』に、「大伯國の富幸神社」が記録されている。古宮跡は富幸神社跡と推定される。

『先代旧事本記大成経』卷七十一 神社本紀

富幸神社を漢音でフウコウと読むか、呉音でフギャウ神社と読むかが重要である。

9 まとめ

720 年成立の『日本書紀』の呉国派遣記録は 4 世紀の吉備国の記録である。しかし、平安時代迄に関係者が全員移転し阿知地名のみが残された。移転先は大和であろう。

239 年に邪馬台国卑弥呼が、魏の首都洛陽に使者を派遣し、明帝から「親魏倭王」に任じられた。邪馬台国の使者たちは、「自分たちは大伯の子孫である」と名乗っていた。地名学では、「人が動けば地名が残る。」と考える。大伯（漢音タイハク）地名の補説である。

吉備国への阿知氏の渡来は、晋王朝（西晋）の滅亡のきっかけを作った皇族同士の内乱である八王の乱（291～ 305 年）以前であろう。

10 謝辞

阿知村桜田の古宮跡と桜田の地名の由来について桜田昌郎氏の教示をえた。「桜田地名は平安時代の京都の公家の名前・櫻田氏に由来している」との説明であった。

11 参考文献

- ① 『チャンダムに見る高麗（韓国）と蒙古（モンゴル）の関係』
<http://www.makisima.org/wiki/wiki.cgi?NoteOnSuraAndChando>
- ② 『日本書紀 上』日本古典文学大系 67 昭和 42 年 岩波書店
- ③ 『古事記祝詞』日本古典文学大系 1 昭和 33 年 岩波書店
- ④ 『阿智神社（奥宮）』http://www.genbu.net/data/sinano/ati_title.htm
- ⑤ 『地名学では、邪馬台国は岡山です。』丸谷憲二 平成 27 年 10 月 13 日
- ⑥ 『古代地名大辞典 本編』平成 11 年 角川書店
- ⑦ 『新日本地名牽引 1』1993 年 アボック出版局
- ⑧ 『日本語をさかのぼる』大野晋 1975 岩波書店
- ⑨ 『日本史年表・地図』第 19 版 児玉幸多編 平成 25 年 吉川弘文館
- ⑩ 『古希じいの食べる話』
http://takahira.cocolog-nifty.com/_takh/2014/07/post-b902.html
- ⑪ 『よみがえった原日本書紀』金森信和 2013 年 和泉書院
- ⑫ 『吉備国の語源「黄蕨」調査報告書』丸谷憲二 平成 20 年 8 月 24 日
- ⑬ 『先代旧事本紀大成経（一）・続神道体系 論説編』小笠原春夫校注 平成 11 年 神道体系編纂会

12 参考

『黄蕨』の出典は、推古 30 年（622）成立の『先代旧事本紀大成経七十二卷本』です。『旧事本紀』は、『先代旧事本紀』と『神代皇代大成経』の二つから成立しています。尾張氏・物部氏等、六家の秘伝書と天皇家の内録という超古代の学問書を「一字一字変えないで写した」と言われるのは『先代旧事本紀』の部分です。『神代皇代大成経』には、聖徳太子が補足説明として付け加えた部分や太子自身が書いた『十七条五憲法』や『予言書』、さらに太子の死後、秦河勝らの手によって加えられた部分が含まれます。